三戸町人権学習モデル講座「みんなにやさしいまちをつくろう」

研 座 演 シ 資 映 他 体 ワ

三戸町教育委員会
青森県三戸町教育委員会事務局
TEL 0179-22-2186

実施年月日 実績等	平成17年3月5日（土） ・参加人数:42人
主催（共催）	青森県人権教育学習推進協議会
開催場所	三戸町ジョイワーク三戸
対象	県民
人権課題	人権全般

事業の目的

鰺ヶ沢町の事例（P30参照）と同様に、青森県が参画した文部科学省の「人権教育推進のための調査研究事業」の実施事業のひとつ。三戸町人権学習モデル講座はその第1回として開催された。

講座では参加体験型のプログラムが組まれ、子ども、高齢者、男女、障害のあるなしに関わらず、誰もが地域で幸せに暮らすことができるコミュニティの作り方を考えることが目的とされた。

鰺ヶ沢町の事例でも行われたが、講座終了後には参加者やスタッフを対象にしたプログラム評価が実施された。

事業概要

国立教育政策研究所社会教育実践研究センター専門調査員の加藤美幸さんを講師として招き、参加体験型アクティビティを含めたワークショップを行った。概要は以下の通り。

①アイスブレーク

○バースデーライン（参加者の関係性を構築するためのレクリエーション。会場内にいる人たち同士が口をきかずに、ウィンクで誕生日を伝えあうことで、全員が誕生日順に1列に並ぶというもの）

②ミニ講義「みんなにやさしいコミュニティづくり」

○国の法律や施策から見た人権教育、「人権擁護に関する世論調査」の概要から、「『みんなにやさしいコミュニティづくり』とは？」といったテーマが論ぜられた。

③ワーク

「じゃんけんトレイン」というゲームで参加者をグループ分けした後、以下のようなテーマでグループワークを行った。

1.グループでの話し合い

○グループ内での自己紹介、「みんなに」「やさしい」「コミュニティ」の意味、「みんなにやさしいコミュニティづくりに何が大切か」を付せん（オピニオンカード）に1人3個以上書き出し、模造紙に貼る。

2.ダイヤモンドランキング

○オピニオンカードを整理しながら、より大切だと考える順にダイヤモンドの形に並べ替える。

○ダイヤモンドランキングを見ながら、「みんなにやさしいコミュニティづくり」のイメージを絵で表す。

3.ミニ発表会

○各グループからイメージ図について発表。

ワークショップのようす

連携状況

県教育委員会と民間で構成される青森県人権教育・学習推進協議会が三戸町教育委員会との連携のもとで運営。当日に必要な備品は町が発注し、支払いは県が行うといった形で進められた。また、ワークでのレクレーションを取り入れたグループ作りなどは体育指導員が担当した。

特色・工夫した点

青森県では他の地域に比べて人権教育の実践例が少ないため、「人権」という言葉に町民が構えてしまう可能性もあった。そこで、研修会の名称にあえて「人権」を用いず、誰もが気軽に参加できる雰囲気を作った。また、チラシを約4,700戸ある町内の家庭すべてに配布するとともに、人権擁護委員・社会教育委員・子育てメイト・福祉施設関係者・障害者サークル関係者に参加を呼びかけた。

実施結果

参加者の反応・事業の反響等

○参加者アンケートの結果は以下の通り。

「アイスブレーク」…「大変よかった」50%、「まあまあよかった」45%、「あまりよくなかった」5%、「全くよくなかった」0%

「ミニ講義」…「大変よかった」41%、「まあまあよかった」50%、「あまりよくなかった」9%、「全くよくなかった」0%

グループに分かれて行われたワークのようす

「ワーク」…「大変よかった」58%、「まあまあよかった」42%、「あまりよくなかった」0%、「全くよくなかった」0%

○当初堅苦しい講座と思っていた参加者も多かったが、アイスブレークで「バースデイ・ライン」が終わる頃には和やかなムードになっていた。

○グループに分かれてのワークでは、あらかじめ適切な段階を踏んだ手順が示されていたため、初めてグループ・ワークをするという人も違和感なく参加できていた。

○模造紙に「みんなにやさしいコミュニティづくり」のイメージを描くときは、グループ内の各自の持つ特技を活かしながら作業を進めていた。発表会でもそれぞれに個性的な発表が見られた。

○参加者は同じ町に住みながらこれまであまり面識がなかった人たちがほとんど。しかし、ワーク中に自己紹介すると実は意外なところでつながりがあることを発見するケースもあるなど、町民たちが知り合うきっかけにもなっていた。

反省点・今後の課題

○講師との打ち合わせが足りなかった。事前に参加者層や希望する講義の内容について十分に話し合っておく必要がある。

○グループでの話し合いは、同じ地域の人を知る、つながりが生まれるという点においても効果的だが、グループの分け方については考慮が必要である。機械的に分けてもいいが、場合によっては、「分け方」そのものについても参加者の同意を得る必要がある。

○「地域やまちを良くしていこう」という意識の高い住民は、参加体験型学習にもそれほど違和感を持たないのではないか。今回はその意識が高かった住民が集まっただけに、最初から突っ込んだ内容にしてもうまく機能したのかもしれない。

○参加体験型学習におけるグループでの話し合いは、「他人の話を否定することなく受け入れる」、その上で「自分の考えを述べる」という流れで進められた。これは日常的なコミュニケーションの基本であるが、参加体験型学習を通してそれを再確認することで他人を思いやるという人権の基本的な部分を身につけることにもなる。

講座「みんなにやさしいまちをつくろう」参加募集のチラシ